

2022年度アーツカウンシル・フォーラム  
「都市の創造力で世界とつながる—東京の現在と未来—」

開催日時：2023年3月2日（木）14:00~16:30

配信：Zoomウェビナー

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京



本フォーラムでは、芸術文化が都市にもたらす価値や、その可能性にフォーカスします。芸術文化や創造力は、私たちの都市や社会の未来を考える上で必要不可欠です。東京都では「未来の東京戦略」を策定し、世界から選ばれる文化都市を目指して、芸術文化による感動や新たな価値の発見、賑わいを創出すると共に、東京の魅力を世界に発信する拠点の形成や芸術文化のエコシステムの構築を推進しています。

今回は国内及び香港からプレゼンターを迎え、芸術文化の創造・発信が活発な都市の魅力や強みについて各々の立場からご意見を伺います。ポスト 2020 の東京は、芸術文化を通じた都市のアイデンティティをどのように発信し、世界都市との交流を深めていくことができるのか、東京の現在と未来について多角的に考えていきたいと思えます。

## INDEX

概要	2
主催者挨拶	3
I. 第1部 プレゼンテーション	4
I-1. 山中珠美「文化の力、都市の未来一人のつながりと社会システム」	5-7
I-2. ポール・タム「Connecting to the World through the City's Creative Power」	8-11
I-3. 内田まほろ「Transport Culture the next 100 years—100年先に文化をつなぐ」	12-14
II. 第2部 ディスカッション	15-23

# 概要

開催日時：2023年3月2日（木）14:00~16:30

第1部 プレゼンテーション

第2部 ディスカッション

開催方法：Zoomウェビナーでの配信

配信視聴：無料

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

## 登壇者（順不同・敬称略）



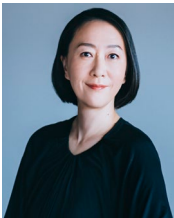
### 山中珠美（一般財団法人森記念財団 主任研究員）

森ビル株式会社入社後、愛宕グリーンヒルズ、ヴィーナスフォート、六本木ヒルズ森アーツセンターのプロジェクトで企画開発を担当。2003年より現職。専門分野は文化と産業、体験型観光、都市計画。東京の観光体験に着目した「東京のブランド力」（2012年）や、都市が持つ文化創造力やその支援方法に着目し、第一線で活躍する文化の担い手らへのインタビューを実施した調査研究「ロンドン式 文化・クリエイティブ産業の育て方」（2016年）、「ニューヨーク版 文化・クリエイティブ産業の育ち方」（2018年・2019年）、「文化の力、都市の未来」（鹿島出版会、2023年）を担当執筆。



### ポール・タム（香港 西九龍文化区管理局（WKCD） パフォーミング・アーツ部門エグゼクティブ・ディレクター）

WKCDでパフォーミング・アーツ部門を率い、世界クラスの舞台芸術のプログラム及び会場・施設を運営。WKCDにおける舞台芸術の戦略策定と持続的な発展をリードし、事業の方向性、創造性の育成、会場運営、技術・制作、施設計画と管理の指揮を担当。舞台芸術のマネジメントに20年以上の経験を持つアート・エグゼクティブ。WKCD入局以前は、香港バレエ団のエグゼクティブ・ディレクターとして、戦略策定、制度設計、ブランディング、教育、コミュニティ支援、国際ツアーを担当。それ以前は、香港フィルハーモニー管弦楽団のマーケティング・ディレクターを務めた。Hong Kong Arts Administrators Association元会長で現在は理事、Federation for Asian Cultural Promotion理事、舞台芸術国際会議アドバンスメント・コミッティー・メンバーを務める。ピアニスト・作曲家としての教育を受け、カナダのヨーク大学でピアノ演奏の学位とアートマネジメントのMBAを取得。



### 内田まほろ（一般財団法人JR東日本文化創造財団 高輪ゲートウェイシティ（仮）文化創造棟準備室室長）

大阪・関西万博 テーマ事業シグネチャーパビリオン「いのちの未来」企画統括。知と美が融合する公共の場づくりを目指し、JR東日本で文化施設の立ち上げに参画する傍ら、国内外のミュージアムにてアドバイザー、コミッショナー等を務める。2002-2020日本科学未来館勤務。科学とアートやデザインを融合した、数多くの企画展、常設展の開発に従事。Barbican Centerゲストキュレーター、グッドデザイン賞審査委員等。



### モデレーター

### 五十嵐太郎（建築史・建築評論家）

1967年生まれ。建築史・建築批評家。現在、東北大学大学院教授。1992年、東京大学大学院修士課程修了。博士（工学）。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッショナーを務める。

「インポッシブル・アーキテクチャー」「窓展：窓をめぐるアートと建築の旅」「装飾をひもとく～日本橋の建築・再発見～」などの展覧会を監修。第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞、2018年日本建築学会教育賞（教育貢献）を受賞。『誰のための排除アート？』（岩波書店）、『新宗教と巨大建築』（青土社）、『増補版 戦争と建築』（晶文社）ほか著書多数。

## 主催者挨拶

### 石綿祐子/アーツカウンシル東京 支援デザイン担当課長

アーツカウンシル東京は、東京都の文化政策を支える組織として、助成事業をはじめ、様々な事業を展開しています。このアーツカウンシル・フォーラムは、2012年にアーツカウンシル東京が発足して以降毎年実施しています。都市と芸術、芸術と社会包摂など、今日のかつ重要なテーマを取り上げ、「国際都市としての芸術文化施策の在り方」をテーマに議論を重ねてきました。

2021年、東京都は長期計画「未来の東京戦略」を策定し、世界から選ばれる文化都市を目指して、東京の魅力を世界に発信する拠点の形成や、芸術文化のエコシステムの構築を推進しています。本フォーラムではその長期戦略を受け、『都市の創造力で世界とつながる—東京の現在と未来—』と題し、都市と芸術文化の関係にフォーカスしていきます。プレゼンターには、ポール・タム氏（香港 西九龍文化区管理局（WKCD） パフォーミング・アーツ部門エグゼクティブ・ディレクター）、内田まほろ氏（一般財団法人JR東日本文化創造財団 高輪ゲートウェイシティ（仮）文化創造棟準備室室長）、山中珠美氏（一般財団法人森記念財団 主任研究員）、モデレーターとして五十嵐太郎氏（建築史・建築評論家）を迎え、議論を深めていただければと思います。

新しい都市と人との関係、芸術文化を通じて都市のアイデンティティをどう発信するか、世界の都市とどうつながるかなど、東京の現在と未来について多角的に考える機会となればと思います。

## 第1部 プレゼンテーション

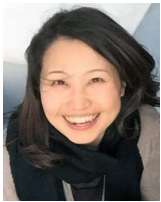


五十嵐太郎 (建築史・建築評論家)



五十嵐：モデレーターの五十嵐太郎です。『都市の創造力で世界とつながる—東京の現在と未来—』第1部を始めます。私は現在東北大学の教授を務め、建築評論・建築の歴史を研究しています。本日はどうぞよろしくお願いいたします。3名の登壇者をご紹介します。発表順に、山中珠美さん、香港から参加のポール・タムさん、そして内田まほろさんにプレゼンテーション頂きます。2部構成の第1部はプレゼンテーション、第2部は4人でディスカッションです。では、山中さんからよろしくお願いいたします。

## 山中珠美「文化の力、都市の未来一人のつながりと社会システム」



山中珠美（一般財団法人森記念財団 主任研究員）

森記念財団の山中珠美です。森ビル株式会社に入社後、企画開発部に所属し、主に行政折衝を担当しました。その後、森アートセンター事務局に異動し、森美術館の立ち上げに関わりました。このときの経験が「都市と文化」という現在のテーマに取り組むきっかけになりました。2003年に一般財団法人森記念財団へ異動し、現在は主任研究員を務めています。専門は都市計画、文化とクリエイティブ産業、体験型観光です。今回の「選ばれる文化都市を目指す」というテーマは、自身が長年取り組んできた調査研究シリーズのテーマでもあります。この調査研究は、都市と文化・クリエイティブ産業研究委員会での議論をもとに進めているものです。各都市での現地調査をベースに「文化の持つ魅力や特徴」を知り、その力を高め、拡大することにより、都市の成長へとつなげていくことを目的としています。

（都市と文化・クリエイティブ産業研究委員会は）当財団の理事長であり、横浜国立大学の小林重敬名誉教授が委員長を務め、森美術館の南條史生前館長、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の稲蔭正彦教授、東京大学大学院工学系研究科の中島直人准教授が委員を務めます。また、クリエイティブ産業は非常に幅が広いので、多分野の有識者の方々にもゲストとして議論にご参加いただいています。

シリーズの第1弾は、2016年に発行した『ロンドン式文化・クリエイティブ産業の育て方』<sup>[1-1]</sup>という報告書です。イギリスのクリエイティブ産業政策をもとに調査を進め、アーティストやクリエイター、大学教授などに話を伺い、クリエイティブ産業の影響を受け発展したショーディッチなど文化活動が活発なエリアを調査しました。

第2弾は、2018年に発行した『ニューヨーク版 文化・クリエイティブ産業の育て方（ニューヨークサーベイ）その1』です。この調査では、クリエイティブ産業を支える

ための枠組み形成に大きな資金が必要となることに注目し、アメリカにおける寄付や投資の文化について調査しました。また、強い文化産業として成長を続けるブロードウェイの調査も行いました。

第3弾は、2019年に発行した『ニューヨーク版 文化・クリエイティブ産業の育て方（ニューヨークサーベイ）その2』です。クリエイティブ産業が育ち、活動が行われる場や都市空間に注目しています。日本でも注目されているブルックリン地区にフォーカスし、文化創造の作業場であり発表の場でもある「ブルックリン・ネイビーヤード」などで活躍する人々に話を伺いました。また、レッドフック（ブルックリン地区）にあるアーティストレジデンシーのパイオニアワークスを訪問し、ニューヨークが世界中のアートコミュニティをいかに惹きつけているのかを調査しました。

第4弾『文化の力、都市の未来』の中で、南條委員は「都市をつくるライフスタイルの背景にあるものが文化である」と捉えておられます。私も「文化は生活そのものであり、心を豊かにし、楽しく暮らしていくためになくしてはならないもの」であると感じており、文化は決して難しいものではなく、日常生活の一部と意識して調査研究を進めています。また、「古いものと新しいもののバランス」という非常に重要なキーワードがあります。調査で「魅力ある文化」を取り上げる際には、必ずこの視点を入れるように心がけています。



[1-1]

今回まとめた『文化の力、都市の未来』の第1章でこれまでの報告書のポイントを掲載しています。インタビュー調査を通じて、アメリカでは「文化はマグネットである」という意識を持っている方が多いと感じました。一方でイギリスは「文化芸術に投資をすることでクリエイティブ産業に波及効果が起こり、クリエイティブエコノミーが拡大する」という印象を持っている方が多いように感じました。本日は東京の現在地を探る趣旨なので、比較対象となるロンドンとニューヨークの事例を紹介します。

まずアートのエコシステムについてお話します。ロンドンでは、アーティストがステップアップできるインフラ、大学やギャラリー、美術館などの施設、それらをサポートする社会の仕組みが存在しています。一方、ニューヨークにはアーティストが活動を続けていくためのあらゆる環境が揃っていることが特徴として挙げられます。教育に加え、制作の場である廉価なスタジオスペースや、発表や交流の機会を得られる場所として大小さまざまなギャラリーもあります。この素晴らしい環境を求めて世界中からアーティストが集まり、そこで生まれる強いエネルギーがさらなる才能と資金を引き寄せるマグネットとなり、サステナブルなエコシステムを形成しています。この現象を本調査研究会では「アートのエコシステム」と呼んでいます。

教育についても触れたいと思います。文化・クリエイティブ産業の観客（受け手）と、制作する側（作り手）の両者を育てることは、文化を強く成長させる上で非常に重要なポイントです。ロンドンやニューヨークでは世界水準の大学が即戦力となる学生を育成し、トップレベルの技術を持つ人が教育に携わっています。高等教育からではなく、子どものころから芸術の創作を行い、世界最高峰の作品に直接触れ、観劇するといった授業が行われ、子どもたちが「受け手」である観客としても同時に成長していることが欧米の大きな特徴といえます。

今回新しく実施したのは東京・日本のリサーチについてです。ステップ1として、都市形成に影響を与える特徴の分析を行いました。その中で二つの特徴にフォーカスしています。一つ目の特徴は「コミュニティの形成はクリエイティブパワーの源泉である」ということです。アートのエコシステムの項目で先述したように、世界有数の作品、才能、資金が集まるロンドンやニューヨークには「文化を愛する人々が織りなすアートコミュニティ」と、「それを支える社会システム」が存在しています。この特徴は「アートコミュニティは国境を越え、人と人とのつながりが大変強固である」という調査結果に基づいています。二つ目の特徴は「クリエイティブ活動の目的」です。文化の成り立ちを知る上で「何のために創造的な活動をしているのか」という目的を理解することは非常に重要な視点です。我々の研究会では、大きく分けて商業目的と非営利目的があると捉えています。言い換えると、利益・ビジネスを目的とする活動と、もう一方が非営利、すなわちビジネスを目的としない活動です。

調査研究のステップ2では、「文化を育み、強く育てていくためには、人のつながり、すなわちクリエイティブコミュニティの形成が重要であり、さらにそれを社会のしくみの中でより大きく成長させていくシステムが必要である」との視点で調査をしています。その中で重要なのは、「日本の文化力・クリエイティビティの強みや特徴は何であるか」ということです。文化を強く育てていくためには自国の魅力を捉える必要があります。

「日本の文化力とクリエイティビティの強み・特徴」は何でしょうか。一つ目は「脈々と続いてきた文化と歴史」です。日本の文化には豊かな歴史があり、今日でもその背景に、独自のものの考え方や、様式、技術の継承があります。日本人はその根底にある美意識や、道（どう）につながる精神を大切にしてきました。二つ目は「作品に息づく精神性」です。美へのこだわりや真摯に取り組む日本人の国民性は、作品の精巧さや完成度の高さとして現れています。日本には古来より自然に対する畏敬の念、さらには遊びの精神があり、その自由な文化環境が多様で多彩な表現を生み出すのではと考えました。三つ目は「型にはまらない表現の自由と多様性」です。欧米に比べ、日本は新しい文化に対する教育やメソッドが弱いといえます。そのため、表現に対する制限や型に嵌めようとする意識が弱く、ユニークな発想やファンタジーな世界観が生まれやすくなり、

結果として強い魅力となっているのではないかと感じています。四つ目は「世界が評価する、クロスオーバーする表現」です。日本では自由で多様な表現が生まれやすく、分野がクロスオーバーしています。アートとテクノロジー、演劇や音楽、ダンス、ファッションなどが交差した境界領域から生まれる表現や作品、才能が、世界から注目されています。この三つ目と四つ目に関わる文化を「クロスオーバーする文化」と名付けました。本研究会の委員の一人である慶應義塾大学の稲蔭正彦先生によると、「クロスオーバー」という言葉には、大きく分けて三つの意味があります。一つ目は、「異なる分野と分野を組み合わせることで生み出すクロスオーバー」です。“点と点を結ぶ (connecting the dots)”ことで、イノベーションの要素でもあります。例として、表現と技術の二つの分野を結ぶことで生まれたカラクリ人形が挙げられます。カラクリ人形の精神は、現在の最先端のロボット技術にも継承されています。二つ目は「定義される分類からはみ出る、スピルオーバーとしてのクロスオーバー」です。日本の国宝である絵巻物『鳥獣人物戯画』に描かれている動物の様子です。芸術としての要素がある一方で、マンガの原点でもあるエンターテインメント性があるといわれています。三つ目は、「作品と作品を組み合わせ、インスパイアされて作り出されるマッシュアップと呼ばれる作品のクロスオーバー」です。例としてイメージしやすいのは、食の世界では今や定番メニューとなった“和風パスタ”や、新しい食材の組み合わせによる海外の“Sushi (寿司)”などが挙げられます。我々の研究会では、この「クロスオーバーする文化」を世界にうまくアピールできれば、これからの日本を牽引する新しい文化として今後大きく成長するだろうと捉えております。

続いて「成長し続けるための持続可能な仕組み（アートのエコシステム）をつくるために何が必要か」を調査しました。日本ではビジネスを主目的とした「利益をもたらす商業活動」ばかりが注目されがちですが、これまでの調査を通じて、実際には非営利—ビジネスを目的としない活動が活発に行われていることこそ、文化を育てる上で非常に重要であることが分かっています。理由の一つに「マーケティングの香りがする場所からは自由な発想や作品は生まれにくい」ことが挙げられます。非営利的な活動は市民や企業などからの寄付によって賄われていることが多くあります。そうした活動を通じてクリエイティブコミュニティが生まれやすく、育まれていると言えます。一方で、商業活動は利益を多く生み出し、さらなる投資や観客、新しい才能を惹きつける力を持っています。だからこそ、この両者の活動が二つのエンジンとして相互補完的に力強く機能することにより、サステナブルにアートのエコシステムを形成できると考えています。しかし、状況を日本に置き換え、特に文化を支援する視点で見た際、「われわれの社会システムは機能しているのか、成り立っているのだろうか」という疑問が湧きました。そこで、東京・日本において調査を実施しています。

ステップ3として、20名を超える有識者の方々にインタビューを行いました。書籍内ではトップクリエイター11名の貴重な意見を紹介しています。アートのエコシステムを形成するために必要な各々の役割を持った方々、プレーヤーにお話を伺うという構成です。この調査では「日本の文化の現在地や、今の日本に足りないもの」について話を伺っており、簡潔にまとめることが難しいのですが、私の印象では「道半ば」という表現がふさわしいのではないかと考えています。日本の芸術分野にもしっかりとしたエコシステムが形成されつつあるという状況ですが、先述したロンドンのようなステップになっているものはまだ見えてきていないのが現状だと感じています。

日本の新たな文化的特徴「クロスオーバーする文化」が数多く生まれているのが、エンターテインメント産業やコンテンツ産業といったジャンルだと思いますが、ここには「システムがやや閉ざされており、現状ではスケールアウトしていこうと考えたときに社会で支える仕組みが未だ見られない」という課題がある印象です。すべての内容をご紹介することはできないため、後ほどディスカッションの中でも触れさせていただきたいと思います。以上で発表を終了します。ご清聴ありがとうございました。



## ポール・タム 「Connecting to the World through the City's Creative Power」



ポール・タム（香港 西九龍文化区管理局（WKCD） パフォーミング・アーツ部門エグゼクティブ・ディレクター

みなさん香港からこんにちは。ポールと申します。西九龍文化地区では、今何が起きているのか、今日はそんな話をさせて頂きたいと思います。タイトル画像<sup>[2-1]</sup>は実に美しく、活気がある京劇俳優たちであり、京劇は西九龍文化地区における重要な舞台芸術の柱です。

少し私の話をさせていただきます。私は幸運なことに、アーティストとしてのキャリアと、それ以外でのキャリアの両方を積んできました。アーティストとしては、カナダ、アメリカ、そして香港で仕事をしてきました。カナダでは劇場、香港では音楽とダンス、さらには英文学と、境界を超えて活動し、非常に生き生きと、色鮮やかな芸術のキャリアを歩んでいます。

そのアーティストとしてのキャリアの間に、ビジネスのキャリアとして、建築事務所のAedasに務めたり、世界自然保護基金

(WWF) で環境保護関連の仕事をしたり、さらに自分のバーとレストランを三年間経営しました。ビジネス経営は自分の人生にとって最良な時間でした。「全ての道はローマに通ず」という古いことわざにあるように、私がこれまでにやってきた仕事はすべて今の仕事、西九龍文化地区における舞台芸術のエグゼクティブ・ディレクターの仕事につながっています。私の仕事を簡単に言うと、西九龍の舞台芸術部門のリーダーです。「戯曲センター (XiQu Centre)」と「自由空間 (Free Space)」という2つの施設を運営しており、現在三つ目の舞台芸術の施設として、「Lyric Theatre Complex」を準備中です。先ほど見ていただいた京劇から、ダンス、演劇、ジャズ、ポップミュージック、そして学習や参加型のプログラムまで、世界レベルのさまざまなプログラムを日々キュレーションし、提供しています。



[2-1]

画像<sup>[2-2]</sup>は、現在私がいる場所、西九龍文化地区です。このプロジェクトがどのような経緯で始まったのかお話しします。当プロジェクトは香港政府による文化インフラへの先見の明かつ戦略的な投資です。2008年、西九龍文化地区の開発と運営を担うWKCD (West Kowloon Cultural District Authority、西九龍文化区管理局) に対し、政府は216億香港ドル (約3,840億円) <sup>1</sup>を投じて、「環球貿易広場 (International Commercial Centre、ICC)」付近にある40ヘクタールの土地を割り当てました。世界的にも非常にユニークな文化地区として、東洋芸術と西洋芸術、伝統芸術と現代芸術の最高峰を集め、「東洋と西洋の文化が交わる中心地」である香港の地位をさらに高

めています。訪れる人々には包括的な体験を、企業にはユニークな機会を提供する統合的な開発が行われています。ここには芸術と文化の施設と、美術館や舞台芸術の建物があります。ショッピングや食事、エンターテインメントが楽しめる場所も多数あり、ホテルやオフィス、居住空間として開発可能な土地と、23ヘクタールの緑地と公共空地があります。総合基本計画を設計したノーマン・フォスター氏は、西九龍文化地区——この40ヘクタールの土地を「都市の中心部に位置する緑のオアシス」に変えようと構想しています。素晴らしいプロジェクトであり、私たちはまさにその途上にあります。



[2-2]

本地区の設計コンセプトと、開発プラン<sup>[2-3]</sup>です。スー  
プ用のおたまのような形をしていて、細長く、下の  
方に広大な緑地があります。最初に開業した芸術文化  
施設が戯曲センターです。二つ目の施設が舞台芸術の  
会場である自由空間で、「アートパーク (Art  
Park)」の中にあります。その次が現代アート美術館  
の「M+」と、2022年7月に開業した「香港故宮文化  
博物館(Hong Kong Palace Museum)」です。

三つ目の舞台芸術の施設として「Lyric Theatre  
Complex」は2026年の開業を予定しています。

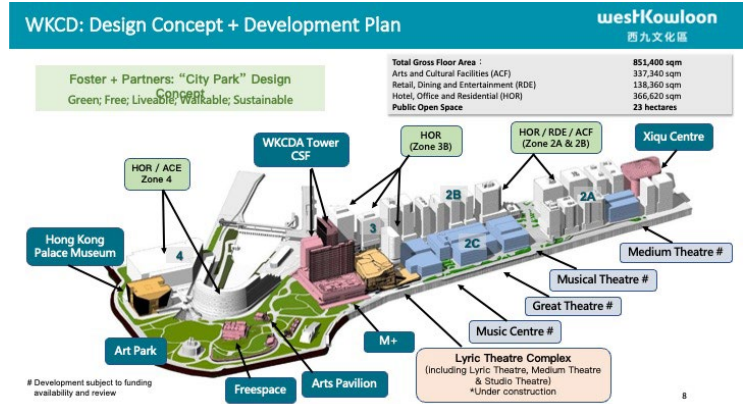
「Music Centre」や「Great Theatre」などの青色の建物は、今後開発される予定です。そのまわりにある白色の建物は、すべて将来的に商業開発される建物です。こちらが西九龍文化地区を日々運営するための資金源となります。

先述のとおり、西九龍文化地区の主な任務の一つは、伝統芸術から現代芸術、東洋芸術から西洋芸術までの、国際的な文化交流の出発点——プラットフォームになることにあります。ここは質の高い芸術文化プログラムを、香港や中国大陸、そして世界へ発信するのに理想的な場所です。本地区は、世界中の文明と文化の間での対話を促すを通じ、「国際文化交流の中心地」として香港の発展をサポートしていきます。東京も香港と西九龍文化地区のきわめて重要なパートナーであることは間違いありません。

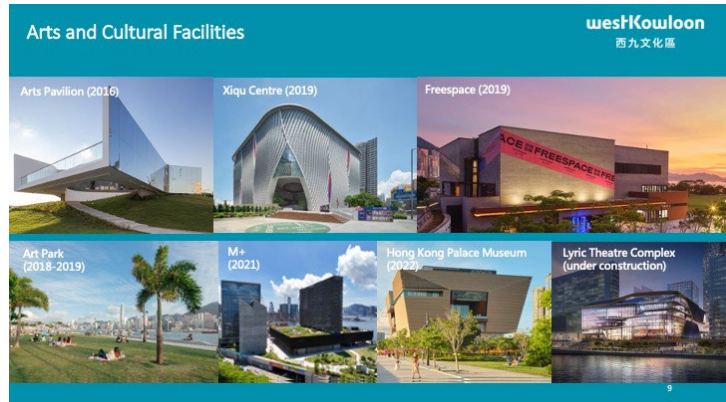
その他の文化施設<sup>[2-4]</sup>の説明を少し。「M+」は、アジア初の「現代視覚文化に関する世界規模のミュージアム」です。20世紀と21世紀の視覚芸術、デザイン、建築、映像、そして香港の視覚文化をとりあげています。2021年11月に開館し、一年間で260万人が来館しました。これは渡航制限が解除される以前のことなので、来館者は基本的に地元市民です。これは驚異的な数字だと思います。

2022年7月に開業したのが「香港故宮文化博物館」です。こちらは西九龍文化地区と北京・故宮博物院の共同プロジェクトです。開館時の展覧会では故宮博物院所蔵の166の第一級文化財を含む900点の宝物が展示され、北京以外で開催された展覧会で最も重要で、必見のものとなりました。1925年に同博物院が開館して以来、最大規模となる大陸外への貸し出しとなったそうです。

私が管理している舞台芸術の「戯曲センター」は2019年1月に開館し、内部には二つの劇場があります。上階は約1千席ある大劇場で、下階にある小劇場は“ティーハウスシアター”と呼ばれています。中国の伝統的なティーハウスから建築の発想を得ていて、ここでは実際にお茶と点心を食べられます。中国のオペラである京劇の元々の意図を再現し、エンターテインメントと飲茶を同時に楽しむことができます。また、館内にはアトリウム、セミナー会場、レクチャーホール、リハーサルスタジオなどもあります。



[2-3]



[2-4]

「アートパーク」の中央付近、「戯曲センター」から半マイル程の場所に「自由空間」があります。緑に囲まれた現代パフォーマンスの中心地です。現代舞踊や現代演劇から、ジャズ、ポップス、インディーズ音楽にいたるまであらゆるものがこの自由空間に集まり、現在進行形で私たちの文化の研究や発展を推進しています。上階には最大規模のイベントスペースがあり、収容人数は450人ほどですが壁を取り除けば立ち見を含め900人が収容可能です。ここでは毎週末コンサートが行われ、インディーズバンドやジャズバンドがライブパフォーマンスを行っており、この地区で注目を集めている施設の一つです。東京と同じように香港にもライブハウス文化があり、観客はお酒を飲んだりスナックをつまみながらライブを楽しんでいます。中でもジャズフェスティバルの開催時は会場の外へ観客が溢れるほど賑わっています。西香港は亜熱帯気候のため屋外で快適に過ごせる期間は6か月程度で、10月から3月が野外ステージでのパフォーマンスを楽しむベストシーズンです。

こちらは開発中の「Lyric Theatre Complex」<sup>[2-5]</sup>です。舞踊と演劇の中心施設として2026年頃にオープン予定です。規模の異なる三つの劇場があり、収容人数はLyric Theatreが1,450人、Medium Theatreが600人、Studio Theatreが270人と、中規模の演劇や現代舞踊向けです。この施設は香港初の専用劇場として流れを大きく変えることになるでしょう。地元の演劇会社が望んでいたのがまさにこの規模の劇場でした。これで大型のプロダクションに投資する必要がなくなり、財務リスクを下げながら十分な観客を呼んでコストを回収することができるようになります。



[2-5]

西九龍文化地区が現在直面している課題についても触れたいと思います。最大の課題は資金です。よく WKCD は政府機関だと誤解されますが、違います。政府の一部でも機関でもない、パブリックな団体です。法令に基づき設立されましたが、政府の一機関ではありません。私たちは香港の空港当局、あるいは香港の病院当局と同じような団体です。私たちが政府から得たのは、2008年と2012年に政府が注入したシード資金です。それが先ほど述べた216億香港ドル（約3,840億円）です。これを使って文化施設を建設しましたが、年間の運営予算を維持するための政府の資金や公的資金は得ていません。従って、枯渇しつつある最初のシード資金の、投資利益による収益のコンソーシアムから資金調達しなければなりません。新しい施設を建築するたびに資金は減っていきます。

博物館や舞台芸術のチケット収入も資金源です。主な収入源はスポンサー費用と寄付、施設の貸出料や、レストラン、オフィス、小売りスペースの賃料です。これらが私たちの年間の運営予算を構成しています。芸術や文化の施設を運営するための非常に高額な運営費を賄うために、非常にクリエイティブかつ起業家的な精神で資金を調達しなくてはなりません。ホテルやオフィス、小売り向けのスペースに建設予定の建物を加えると、商業開発向けの施設が366,620㎡あります。そのうち138,360㎡は、エンターテインメント用、レストランおよびショップ用です。

また、西九龍のアクセスについても、戦略的な位置づけがなされています。香港高速鉄道の駅は当地区の目の前にあります。西九龍からグレーターベイエリア（粵港澳大湾区）の都市である深センまたは広州までは15～45分ほどの距離です。九龍から香港国際空港までは約22分で行くことができます。香港地下鉄のMTRの2つの駅、柯士甸（オースティン）駅、九龍駅は当地区の目の前にあり、交通の便は大変優れています。屋外イベントやポップフェスティバル、ジャズフェスティバルなど大規模イベントでは大勢の観客を呼び込むことができ、観客にとっても会場へのアクセスはスムーズです。

西九龍には大勢の人々が訪れますが、彼らは世界レベルの芸術と文化を楽しみながら、ビクトリア湾が臨めるレストランでワインを飲んだりランチやディナーを楽しんだり、昼夜問わず楽しい体験を満喫しています。このようなインフラを通じて私たちが目指す大きな目標は「香港における文化ツーリズムの向上」です。「M+」と「香港故宫文化博物館」についてはすでにご説明しましたが、ここでは非常に注目度が高い展覧会を通じて年間400万人を呼び込むことが可能です。「M+」では

草間彌生氏の個展が開催中<sup>ii</sup>ですが、日本以外で開催される草間氏の展覧会において最大規模の個展となっています。非常に人気が高く、地元の人たちだけでなく多くの観光客も惹き付けています。

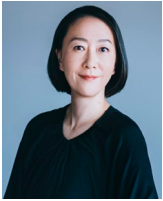
「アートパーク」も屋外パフォーマンスやイベントを活用した場所づくり戦略で、多くのビジネスチャンス呼び込んでいます。現在、屋外で二つの光のフェスティバルが開催されています。一つはスイスのアーティストであるダン・アーチャー氏による『Borealis』で、もう一つはドイツのアーティストのロバート・サイデル氏による『Petrichor』です。これにより毎晩約5千人が西九龍文化地区を訪れ、光のショーだけでなく地区内の他の場所も訪問して楽しんでいます。そして「戯曲センター」は京劇を紹介する拠点となることを目指しており、「Lyric Theatre Complex」のオープン準備も並行して進めています。

2023～24年に予定されている舞台芸術プログラムでは、今年10月にジャズフェスティバルを開催します。50組近いアーティストが参加予定で、海外のアーティストを招待できるのは今回が初となります。ご存知のように香港では入国制限が解除されつつあるため、観光客だけでなくアーティストも海外から呼ぶことができるようになりました。今回は史上最大規模のジャズフェスティバルになる見通しで、5万人以上の来場者を見込んでいます。

3月22日から4月2日までは、『HKT×WESTK POPFEST』が開催されます。年1回開催予定の音楽フェスティバルで、今回が第1回となります。70組のポップスターおよびグループが西九龍文化地区にある屋内外の会場に登場し、10日間の来場者は3～4万人を見込んでいます。ミュージカル『Impossible Trial』は11月に上演予定で、昨年秋に好評を博した舞台の再演です。戯曲中心のティーハウスでは『Magic Tea House』が上演されます。ロボティクスをテーマとするパフォーマンスで、香港では初演となります。4月末まで6か月間上演されます。



## 内田まほろ「Transport Culture the next 100 years—100年先に文化をつなぐ」



内田まほろ（一般財団法人JR東日本文化創造財団 高輪ゲートウェイシティ（仮）文化創造棟準備室室長）

私は「キュレーター」や「展示プロデューサー」という肩書きで多くの展覧会などをつくってきましたが、現在はJR東日本文化創造財団 高輪ゲートウェイシティ（仮）文化創造棟準備室の室長として、街の開発と共に、伝統と未来、自然と技術が融合するような文化拠点の準備をしています。それ以前は『日本科学未来館』という未来をテーマにした国立の科学館で、アートやポップカルチャーを融合することにより未来と社会をつなぐ展示やイベントの開発をしてきました。また、海外のミュージアムにて「日本の科学技術や文化の紹介」も長いことさせていただいています。2025年に開催予定の『大阪・関西万博』では、石黒浩先生（ロボット研究者）とパビリオンの企画統括も行っています。日本科学未来館に大きな地球儀を作り、「地球の美しさを大切にしながら共有するプロジェクト」など、石黒先生たちと一緒にロボットの展示を多く実施しました。また、ミュージシャンの渋谷慶一郎さんと石黒先生とロボットがオーケストラの指揮者になるイベントも仕掛けました。現在もAIという言葉が毎日のように飛び交っていますが、情報科学の研究者である落合陽一さんと共に、AIとひとくくりで言わず、「計算機が未来に私たちの自然観や現実感をどう変えていくのか」という常設展を企画しました。国立の科学館というと堅くてなかなか普通に使えないイメージがありますが、あえて夜間に音楽イベントを実施したりもしました。ミュージシャンのピョークさんが二度来日してコンサートを行ったり、彼女の実験的なVR展覧会のベニューとなるなど、世界的なアーティストとのコラボレーションを行いました。

他にも、企画展としてサイエンス&アートやメディアアートの展示—例えば『日本のものづくりの魅力を楽しく面白く伝える展覧会』や、現在世界的に活動されているチームラボさんと最初に一番大きな展示をやったり、テレビゲームの展覧会や、ウォルト・ディズニー・カンパニーの原画を借りてアニメーションの技術の歴史とディズニーという会社のビジネスの歴史を両方合わせて読み解く展示や、『デザインあ展』とのコラボレーションなども仕掛けました。また、2019年にはロンドンのバービカンセンターで行われた展示にゲストキュレーターとして参加し、“AI: More than Human”という題で、歴史やコンピュータサイエンスのテクノロジーとクリエイティビティを統合したAIへの取り組みを展示にしました。私としては、せっかく日本人のキュレーターが入るので、八百万の神というかアニミズムから、『ドラえもん』から日本のロボティクスまで、そして真鍋大度さんなどアーティストの作品につなげるようなキュレーションをしました。

二年ほど前から鉄道会社の文化創造施設の準備に携わっています。本日のテーマは都市とクリエイティビティなので、われわれの館の話をしたと思います。高輪ゲートウェイシティはポールさんの西九龍に比べると随分小さいスペースだと思うのですが、東京では大きいと言われています。品川から一駅で、山手線の30個目の駅です。二年前には「なぜ“高輪駅”ではないのか」などと駅名で結構バズったりもしましたが、駅の前にある元々鉄道用地であったところを全部使って、新しい街の開発を行っています。

先ほど山中さんも「東京はビルがいっぱい」と話されていましたが、ビルが多過ぎるので、4棟の高層ビル内<sup>[3-1]</sup>に低層の文化創造棟を造ります。2025年から順にビルが開業し、落ち着いたタイミングでさらにビルが2棟でき、品川とつながるとても大きなエリアになります。街の特徴として、“長さ”が挙げられます。歩車分離で歩行者デッキがトータル2km以上と距離があり、“長さ”は街としての物理的な特徴だと思っています。



街のミッションが「100年先の心豊かな暮らしを実現する実験場」ということで、そこに合わせて「100年先に文化をつなぐ」<sup>[3-2]</sup>というミッションを掲げて活動しています。“高輪”と聞くと多くの日本人は『忠臣蔵』を想起するようですが、江戸の中でも文化的に栄えた場所です。明治に鉄道が日本で初めて走ったときの用地で、当時の石垣が開発途中に発掘されたりもしました。高輪は明治の技術のイノベーションの象徴の場でもあります。これから100年後、産業社会や情報社会を経て物理的に相当豊かになった先、山中さんの発表にもあったように「心の豊かさ」ということを考えたときに、文化が非常に重要になる時代が訪れると信じて、100年先に文化のイノベーションをやっていくぞという思いでいます。

館の活動としては、三つの柱を掲げています。文化業界もそうですが、日本はとても年齢層が上がっているので、可能な限り若い人も含めて一緒に未来を創るフレームを作りたいと思っています。

私が科学館にいたということもありますが、理系・文系の枠を超え、伝統文化とコンテンポラリーアートと近代などの縦割りを超え、さらにジェンダーや障害の有無といったダイバーシティも当然ながら、ロボットやAIなどの新しい人類の形となる生物らしきものも含めた多様なプレーヤーと文化を生み出すイメージを持っています。

また、文化施設というものは意外と「自然と一体になるような活動」をしていないのですが、隈研吾さんデザインの外装がとても自然にあふれているので、自然と共に日本の伝統文化をつないでいく役割を果たしたいと考えています。何でもやるということではなく、外部の方やアドバイザー、それこそ国内外の文化組織、学校や企業などの皆さんと共に造っていく体制でいきたいと思っています。

ファシリティに関しては「BOX」と呼ばれる三つのスペースを擁しており、エキシビションホールやシアターと名付けていません。デジタル技術の発展にも起因しているのですが、展示会のようなパフォーマンスや、パフォーマンスのような展示というものがあると思います。それぞれの箱の特徴がありますが、展示場や劇場という名前を付けずに「BOX」という形で三つのスペースを用意しています。また、オープンスペースとして約100畳の畳の間も用意していますが、こちらは比較的珍しいものではないかなと思います。この四つの場所がさまざまなプログラムを展開する中心的な空間になります。もう一つ「公共空間」というか、共用部のようなスペース、ルーフトップや公園横にオープンスペースがあります。2025年度の開業を目指しています。こちらも情報インフラをしっかり整えたいと思っています。

(館は)われわれが一括運営します。先ほどの「BOX」はバラバラに企画するのではなく、一つのテーマを掲げ、そのテーマに関係する展示会やパフォーミング・アーツやアクティビティを、ある意味トリエンナーレやビエンナーレ、フェスティバルのような形で行われるプログラムの編成を考えています。「鉄道会社がやる」という特性を生かして、日本全国の地域や世界とつながっていければと思います。本日は都市がテーマですが、現代では都市といってもバーチャルのような話もありますし、観客はローカルだけではない時代になってきているので、地方・地域・全国と世界をつないでプログラムを行っていきたいと考えています。

### Transport Culture to the Future 100年先へ文化をつなぐ



3-2

「都市と創造力を考えるための幾つかのボーダー」<sup>[3-3]</sup>についてです。私は「文化が豊かになることは多様性が受け入れられ拡がっていくこと」で、そのためにいろいろなボーダーを消していくことが重要だと思っています。皆さんの発表ともすごく呼応する部分があり、個人的には山中さんのレポートが答え合わせのようで、「まあまあ合っていたな」という感覚でした。

1～4は、社会全体で取り組むことだと思っています。5～7は、テクノロジーがどんどんボーダーを消していく話です。8～10は、われわれアートプロデュースやコンテンツプロデュースの役割だと思っています。詳細についてはディスカッションでご説明できればと思いますが、われわれの館でいうと、こういうのは当たり前というか——社会でも度々話題になることですが、「9：エキシビションとパフォーマンス」に関わる人たちもどんどんミックスしていくことは必要だと思っています。おそらく、未来のお客さんたちはそういうものを見たいのではないかと感じています。

#### 都市と創造力を考えるためのいくつかのボーダー

- 1： **パブリックとプライベート Public and Private**
- 2： **都市と地方 Urban city and countryside**
- 3： **伝統と未来 Tradition and Future**
- 4： **性別、人種、専門性、属性、障害の有無、年齢 Diversity**
- 5： **フィジカルとバーチャル Physical and Virtual**
- 6： **自然と人工 Nature and Artificial**
- 7： **人間と機械 Human and Machine**
- 8： **和か洋 Japanese or Western**
- 9： **エキシビションとパフォーマンス Exhibition and Performance**
- 10： **ミュージアムとシアター Museum and Theater**

3-3

「8：和か洋」ですが、日本の古典的な伝統芸能に対する様々な試みはあれども「コミュニティが気持ちよく混ざっていかない」という問題があると捉えています。われわれの館ではそういう部分にも寄りできればと思っているのと、日常生活の中に伝統の文化を「きちんと取り入れていく」ことも、館の日常的なアクティビティの中でやりたいと考えています。

「3：伝統と未来」について、月を事例に出します。日本において、月は「月見」など伝統文化の象徴的なテーマであり、愛でるものの一つである一方で、科学技術の先端にあるテーマでもあります。実は高輪はその昔「月見の名所」で、東京湾に映る月をみんなで愛でたという歴史があります。私たちの館の上にこのような水盤を敷いて、百何十年前に見た月を当時と同じように愛でたいと思っています。このような一つのテーマも伝統的な切り口から未来への切り口をどんどん拡げていきたいと思っています。

また、都市を考えたとき、管理区分は「1：パブリックとプライベート」だという話があります。東京はガチガチに管理されているので、アーティストが道ばたで何かをやりたいと思っても、許可の取り方を知るだけでもとても大変です。駅はパブリックスペースだと思っている方も多いかもしれませんが、実は鉄道会社の私有地です。鉄道会社なら、そのパブリックとプライベートの在り方を少しずらした街の運営ができるのではないのでしょうか。そういう事例が東京中に広がって、例えば都市のビジネスのビルの横では週末になると地元の小学生や中学生がダンスの練習する、そんな風景がいろいろな街に拡がっていくといいなと。このような活動を街として、文化創造棟としても仕掛けていきたいと思っています。

## 第2部 パネルディスカッション

五十嵐：山中さん、タムさん、内田さんとディスカッションを始めたいと思います。

山中さんには本日海外でのリサーチ内容を紹介していただきました。ロンドンとニューヨークは「鉄板」といえばそのような気もしますが、この二つの都市は今回のテーマを考える上ではやはり非常に重要なのでしょうか。基礎的なことで恐縮ですが、改めてそのことをお聞きしたいのと、その二都市は昔から文化を発信する都市として勢いがあったのか、もしくはある時点から今のような状態になっていったのでしょうか。



山 中：ありがとうございます。このシリーズは、実は「全部連続してストーリーができていく」というのがミソなのです。ロンドンに注目したきっかけは、2012年のロンドン五輪です。開催地候補地にパリとロンドンが最後まで競っていたのですが、ロンドンが選出の決め手になったのが「文化プログラムのプレゼンテーションが非常に素晴らしかった」からでした。（ロンドンの文化プログラムが）世界的に高く評価されて五輪開催地に決まったということで、関係者にしてみると「ロンドンはパリを上回る文化プログラムを創っている」という点に衝撃があったような印象があります。有識者の先生方は「ロンドンは政策的にしっかりと考えて取り組む都市」と位置付けていらっしゃるのので、（文化プログラムとして）何をやっていたのかを調べてみたらどうかということから始まったのがこのリサーチです。私は実際にロンドンに向かい、国立大学「ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（Royal College of Art, RCA）」の先生方にヒアリングを行いました。「政府は現場の人たちに乗った」という言い方をされていました。実際にはデザイナーや音楽、映画、建築などで素晴らしい才能を持った人たちが出てきたムーブメントが先に起きていてそこに政府が乗った、というのです。

実際に調べたところ、「アートマーケットの比較」としてはご想像どおり圧倒的にアメリカが1位でした。アメリカを3としたら、中国とイギリスが1とか2とかの規模感だと思います。ではなぜアメリカはアート市場が強いのか、どうやってシステムをつくっているのかを探るためアメリカも調べに行きました。人もお金も情報もすべて集中しているのがニューヨークです。ブロードウェイがアートだけでなく演劇産業も常に世界のトップでいられる理由をリサーチしました。調査報告にもあるのですが、実はニューヨークでは政府がそこまでお金を入れていないという実態があり、民間の企業努力によって資金をうまく循環させていることがわかりました。そのため「エコシステム」という言葉を使っているのですが、その仕組みが非常によくできているのがアメリカの特徴で、その仕組みを日本に持ってこられるのが次の課題になります。

五十嵐：ニューヨークでは民間のお金もすぐく回っていますね。多くのオペラやミュージカル作品がロングラン公演をしており、「観光客はニューヨークに行ったら（ミュージカルやオペラを）観に行く」ことがちゃんと予定に組み込まれているというか、「（ニューヨークへ行くこととは）そういうもの」になっていると感じます。日本でも限られた一部の作品がロングラン公演されていますが、ニューヨークのように長く回したり、オペラも複数の作品を1シーズン内で入れ替わり公演することは難しいです。「ニューヨークに行けばそれを観られる」というものができているのがやはり強いのですかね。

山 中：本当におっしゃるとおりです。私は発表内で「スケールアウト」という表現をしましたが、ニューヨークではスケールアウトしていくことが初めから目標の中に入っているのです。「世界中の観客に作品を届ける」ところまでちゃん



と見越しているのがアメリカのやり方です。残念なことに、日本はそこまで「世界の人たちに自分たちの作品を全部見てもらおう、全世界に届けよう」と思いつくっている人たちが少ないというか……社会のシステムとしてまだ出来上がっていないから届けることができない、という言い方が正しいかもしれません。その一歩手前で足踏みをしているのかな、という印象です。

五十嵐：タムさんや内田さんも山中さんに聞いておきたいことがあれば、いかがですか。

内 田：ロンドンとニューヨークに比べ日本は「一歩手前」とおっしゃっていましたが、本当に手前なのか、本当にやる気があるのか、というところですね。アジアの中でミュージアムが最初にできたのは日本ですし、150年以上の歴史があります。日本には歌舞伎などオリジナルのパフォーミング・アーツが古くからあり、相撲なども含めパブリックに文化を共有することは元来からあると思いますし、伝統芸能関連は海外にも受け入れられている。近・現代のものについて、例えばK-POPのように「世界に向けてやろう」という姿勢を日本は持っているのか、やる気があるのか——それは東京都や文化庁など、最初に「非営利でない」と新しいものはなかなか生まれにくいという思想があって、それが海外へ向けてスケールアウトしていくように設計されていないのではないかと。そういう流れにしようとしているのかどうか、山中さんにその辺りの仕組みの違いをお聞かせいただきたいです。

山 中：そうですね、内田さんは今現場で戦っていらっしゃるの、「一歩手前ではなく10歩手前なのではないか」という感覚があるのだろうと拝察しました。実際に日本でミュージカルをされている方や、株式会社ホリプロの堀義貴社長にもインタビューをしましたが、「海外でチャレンジする」ことは皆さん今までかなりやってこられました。『週刊少年ジャンプ（集英社）』編集部で副編集長を務める齊藤優さんからもお話を伺ったのですが、ジャンプでも『世界を目指そう』という取り組みを行っているそうです。多くの方のご意見を伺った結果、どうやら日本では「一度や二度の失敗でやめてしまう」文化がある印象を受けました。アメリカでは起業は当たり前で、アントレプレナーの精神として「当たるまでやる」とか「外れるのが当たり前」という感覚が根底にあると考えています。日本の「一回やって一回で成功しよう」という考え方を変えていくことが、今は一番必要なのではないかと考えています。私は（成否を）数字で測り過ぎる点を非常に気がかりに感じていて、「いくら利益を上げたか」や「何万人集客できたか」と、数字ばかりで測ろうとするのは危険だと思います。非営利の活動、ひいては面白いものが生まれるような活動は、取り組んですぐに大きなバックが戻るものではありません。数字ばかりで測ってしまうと「面白いものが次々出てくるような活動を根こそぎ削ぎ落してしまう仕組み」に再び入り込んでしまうのではない不安を抱きました。私たちは「文化を育てる」ことをキーワードにしていますが、「どうやったら育つか」をきちんと考えていかないと育つべきものも育っていかないのではないかと。社会の仕組みという形で見たときに、「（文化というものは）放っておいたら勝手に育つもの」ではないと考えています。

タ ム：香港在住の日本人ではない者からすると、日本からは巨大な文化資産が生まれていると思います。先述のとおり現在香港の「M+」にて「草間彌生回顧展『Yayoi Kusama: 1945 to Now』」を開催中ですが、非常に人気で、作品と写真撮りたい多くの方が来場しています。彼女はまさに文化アイコンで、作品は商業主義にも浸透しています。良い例がルイ・ヴィトンで、近年彼女はコラボレーションを行っていますね。また、我々は4年前に坂本龍一氏と一緒に仕事をしましたが、彼はまぎれもなく偉大な人物でした。現代アートの分野では、昨年2022年に梅田宏明氏と共同プロジェクトを行いました。彼は20年前に期待の新人として登場しました。たしかイギリスのガーディアン誌が最初に特集記事を組んで、彼の舞台のレビュー記事を掲載しました。以来、梅田氏は世界の文化アイコンとして安定した活動を続けています。私は、個人的には日本の文化資産はきわめて巨大だと思います。また、アメリカの話もされていました。アメリカの市場が非常に好調であることは私も知っています。北米、ワシントンDC、トロント（カナダ）に住んだことがありますし、ブロードウェイでプロデューサーをしている友人も大勢おられます。アメリカのビジネスモデルは政府から一切資金を得られないため必然的に生まれたものだと思います。芸術

団体が生き残るには、美術館であっても民間の寄付、あるいはチケット収入から資金調達をしなくてはなりません。そして多くの場合、彼らはツアー興行で資金を得ています。ですから、全てのアーティストが「自分たちのゾーン（何とか稼いでいるという現状）から抜け出したい。異なるメディア、アーティストとコラボレーションしたい」と考えていると思います。アメリカン・バレエ・シアターは1年のうち10か月間のツアー興行を行っています。ニューヨーク・フィルハーモニックやシカゴ交響楽団などのチケット代はととも高額です。こうした団体がツアー興行で資金を作っていることは間違いありません。資金調達の方法は都市や国により異なりますが、結局アーティストが内向きになるか外向きになるかを決定づけているのは、政府の方針と文化的エコシステムだと思います。現在の香港は非常によく似た状況にあります。香港は日本とは異なりとても狭いです。私たちが外向きに、海外に目を向けるにはどうすればよいか？アーティストも同様です。これこそまさに今私たちの政府がさらに推進したいと考えていることです。アーティストを海外や中国本土へと外に向けてプロモーションし、逆もまた然りということですが、香港内の6百万人の来場者で満足するわけにはいきません。外に目を向けなければならないのです。

五十嵐：ありがとうございます。せっかくの機会なので香港の話を知りたいと思います。僕が初めて香港を訪れたのはおそらく30年ほど前でした。当時は「香港文化中心（Hong Kong Cultural Centre）」や「香港美術館（Hong Kong Museum of Art）」という施設があった程度で、今とは全然状況が違ってたと記憶しています。僕は建築やデザインの動きに関心があるのですが、近年は非常に加速度的にいろいろなものが増えた印象です。例えば『深セン・香港都市/建築ビエンナーレ』を開催したり、香港で『ビジネス・オブ・デザイン・ウィーク（BODW）』というイベントを実施して毎年パートナーの国を決めたり……僕も一度参加しましたが、そういったデザインのイベントがあったり、あるいはアートバーゼルを香港でやるようになったり……。今度、深センで巨大な建築プロジェクトというか、10個くらい文化施設をつくるプロジェクトがあります。デザインセンター的なもの、『ヴィクトリア&アルバート博物館』と連携しているのではないかと思います。以前は小さな漁村だった深センですが、一気に今のような状態になりました。香港と深センはある意味隣り合う都市で、それぞれに大きく変化したり発展したりしていると思いますが、相乗効果というか、関係性についてはどのように捉えていますか。

タム：非常に面白い着眼点だと思います。深センは一つの村から現在のよう都市に発展しました。“グレーターベイエリア（粵港澳大湾区）”と呼ばれる地区があり、香港はその一つです。ここには深セン、香港、マカオ、広州を含む八つから九つの都市があります。グレーターベイエリアの人口は8千万人です。深センを競争相手ではなくパートナーと捉えることがとても重要です。共に成長することでグレーターベイエリアを活気ある芸術と文化の地域に発展させることができるからです。深センは、大規模かつ急速に発展している中産階級のコミュニティです。ご存知のように、アートとはまさに中産階級のブルジョアジーが追い求めるものです。人々は、人生でより良いものを手に入れたいと思えば、ギャラリーに行って絵画を見たり、オーケストラのコンサートやバレエを観に行ったりします。つまり、グレーターベイエリアとは8千万人の中産階級人口を抱えていて、大規模かつ急速に発展している地域であり、彼らがビジュアルアートやパフォーマンスアートの巨大な観客市場となる可能性を秘めています。先述のように香港高速鉄道はグレーターベイエリアと香港をつないで移動時間を短縮しています。深センまでは15分、広州までは45分です。広州に住む人々がジャズフェスティバルを観に香港を訪れるとしたら、日帰りもできますし、西九龍近郊のホテルに滞在してパッケージツアーなどでショッピングや食事、美術館、ショーなどを数日間楽しむこともできます。ちょうど先週、深センの政府関係者と話をしたのですが、深センでは現在、オペラハウスとコンサートホール、図書館を建設中とのことでした。また、今後十年間に及ぶ、「10 Major Mega Architectural Projects」という文化プロジェクトも進行中とのことでした。私はこれらにととも勇気付けられました。香港でも同様に建設が進行中だからです。西九龍はもちろんのこと、東九龍でも香港政府が開発を行っています。ここはアートとテクノロジーの地区です。また、香港と深センは密接に連携しており、真のグレーターベイエリアを構築することができます。この三角の部分が芸術と文化の主要な地域になるのです。ちなみに、建築家のジャック・ヘルツォーク氏が今年のバーゼルのイベントで香港にいらっしやるそうです。よろしければ是非お越しください。

五十嵐：ありがとうございます。お二人からは香港の話を含めて（質問）いかがでしょうか。

山 中：「再開発で街をつくる」というのは、実は一つの危険性をはらんでいます。劇場や美術館は非常に立派なものができるけれど、コミュニティがそこにはないという問題があるのではないかと考えています。コミュニティづくりはどういうふうに取り組まれているのか、非常に知りたいです。

タ ム：良い質問ですね。西九龍文化地区についてはお答えできると思います。私は開業以前からWKCDに参加しました。当時は多くの建物が建設中で、人の出足はかなり鈍かったです。現在は二つの美術館が完成し、緑地やアートパークも完成しています。私は毎日仕事に行くとき、まるで公園へ遊びに来ているような気分になります。週末には1日1～2万人が西九龍を訪れ、ここを満喫しています。基本計画の設計はすべて、ノーマン・フォスター氏が手掛けました。かつて人々は展覧会を観るために美術館へ、ショーを観るために劇場へ赴き、それが終わると家に帰るか、外食などの選択肢は他の場所がありました。これが従来のスタイルで、機能ごとに分かれていました。「美術館や劇場へは目的のためだけに行く場所だ」と。21世紀ではこの従来モデルは時代遅れです。私たちは「体験する」というイベント全体について再考する必要があります。四方を壁に囲まれた建物の中で卓越した芸術を鑑賞する、これが主な柱です。しかし、もう一方では、鑑賞の前後にどうやって車を駐車するか、家から会場へどう移動するかといった課題があります。鑑賞前に食事をする時間はあるのか？あるいは鑑賞後にどこでお酒を飲み、友人と語ることができるのか？美術館へ行くことや芝居を観ることはソーシャルな体験であり、人々は友人と（体験を）共有したいと考えます。西九龍地区にはこうした体験のためのインフラがすべてそろっています。例えば草間氏の展覧会に来たとします。香港はなんといってもショッピング天国なので、さまざまなアイテムや草間氏のグッズを購入し、次にM+内のレストランで食事をします。あるいは港を眺めながら遊歩道を散策するのもいいでしょう。私たちはこうしたことをキュレーションする際、「西九龍を訪れる誰もが半日以上過ごせるように」と考えました。ですので、美術館で二時間程度を過ごしたのち、外に出て周囲を散策したり、お酒を飲んだり、海や港を眺めたり、芝生に座ってくつろいだりできるのです。

もう一つ、西九龍のコミュニティの場所づくりに関して言えるのは、「ペットフレンドリーである」ということです。世界中の他のどの地域でも、国営公園にはペットの連れ込みが禁止されています。芝生には柵が設置されていて、人々は芝生に座ることができません。しかし西九龍では、芝生に座ったり、frisbeeをしたり、凧をあげたり、川で魚釣りをするなんてこともできます。自分の犬を連れてくることもできますし、私は亀を見たことがあります。ペットの亀をアートパークに連れて来た人がいたのです。こうした光景が、香港に住む人だけでなく香港へ観光で来た人にも利用しやすく居心地のよい雰囲気を生んでいます。私は毎週土曜日と日曜日にも出勤していますが、西九龍の仕事で最もやりがいを感じるのは「人々の笑顔を見たとき」です。人々は劇場にいるときだけでなく、芝生にいるときにも香港人として時間を満喫しています。すべてが無料です。空気も無料、芝生も無料。西九龍文化区を構成している要素の中で最も素晴らしいのは一般市民と内部の芸術や文化との間の距離の近さ、居心地の良さや寛容さ、そしてインタラクティブ性だと思います。是非訪れてみてください。東京、日本から香港へ来て、ご自身で西九龍を体験してみてください。皆さんを歓迎します。

内 田：「M+」だけでもとても立派な施設ですが、その何倍もある多様なギャラリー、ミュージアム、シアター、シネマが全部できて、それらをプログラムしていく人材も必要だと思います。アートプロデューサーやディレクター、キュレーター、実際のアーティストやプレーヤーも当然必要ですが、香港では“仕掛ける方”の人材育成をどんな形で行われているのでしょうか？西九龍ではどのようなジャンルの人たちを雇って育てようとしているのか、お話を伺いたいです。

タ ム：これはとても面白い話ですね。西九龍、特に「M+」のスタッフは国際色豊かで、彼らの出身国は30～40か国にわたります。舞台芸術について国際的なミュージアムを作りたいのであれば、さまざまな視野を持つ必要があります。

スタッフ全員が香港出身者であれば香港中心の物の見方になり、視野が狭くなりかねません。ヨーロッパ的な視点や、北米、東南アジアだけでなく、中国大陸の視点さえ持たなくなる可能性があります。

M+の舞台芸術や二つの美術館のプログラム部門は、さまざまな国のスタッフで構成されていて、三つの部門の中でも最も国際色豊かと言えるのではないのでしょうか。ディレクターのスーニャさんはスリランカ出身でオーストラリアでの経歴もあります。キュレーターはドイツ出身者や、カナダ出身の友人もいます。もちろん香港人もいますし、中国大陸の人もいます。彼らと一緒に飲みに行くと、そこはまるで国連のようで、そして各々が母国について話すのです。こうしたことはとても健全なことだと思います。日本や香港などの現地の知識、現地の文化を知ることができるだけでなく、異なる視野が同僚たちから得られるのです。そういう意味で、結局こうしたことはすべて交流になっているのだと思います。海外出身の同僚たちは、香港へ来て香港の文化を受け入れながら、お返しとして視野の異なる面白いキュレーションを構築していく。ここで一年、二年、三年と働いた人たちがいつかここを去っても、すべては彼らの中に残り続け、そうしたものが消えることは決してないでしょう。西九龍の人材について話すとき、国際性はとても興味深いものがあります。また、私たちが戦略として重視しているトレーニングに「外に出る」ことがあります。ですから、旅行ができなくなった過去三年間はとても忌々しい期間でした。この三年間、私は何度も香港について考え、舞台芸術施設について考え、海外出身の同僚と話をしました。まるで香港が地球上から消えてしまったかのようでした。オンラインで大抵のことが済ませられるからこそ、実際に会う必要があります。コラボレーションについて語りたければ、友だちや、新たな友だちと面と向かって話をする必要があります。海外との行き来が再び解放された今、国際社会とのつながりを取り戻すだけでなく、学芸員のスタッフ全員を途切れることなく海外に行かせることを考えています。私たちはまだ新しい団体で、西九龍文化地区は、日本社会や欧州・北米の人々にとって目新しいものです。ですから、私たちが海外に出かけて対面で話しをすることが重要なのです。これがもう一つのトレーニングであり、私たちが行っている使節的な活動です。

また、もう一つ重要なことは、学芸員に自由に質問させることです。西九龍では、各々が自分の立場で話ができるように、プログラムの作成に関してトップダウン式の組織にはなっていません。誰もが責任の一端を担うことができます。アイデアやコンセプトがボトムアップ式にスタッフから私に提案されることもあれば、私からスタッフに提案することもあります。非常に健全な状態であるといえます。「私の指示通りにやりなさい」といった、古くて上下関係が固定した状態にはなっていません。時々そうなることもありますが、あくまで時々です。これこそ世紀的な健全なやり方だと思います。私たちにとって重要なことは、学芸員のスタッフをいかに再トレーニングするかです。アンケート調査によると、学芸員たちは責任を持ちたがっています。つまり、アイデアを提案してそれを実行し実現できるようにしたいと考えているのです。スタッフを定着させ成長させるにはそれがカギになると思います。

内 田：先程の「日本が外に出ていく、いかないみたいなこと」にもつながる、大変素晴らしいコメントをありがとうございます。

五十嵐：ありがとうございます。西九龍の場所を地図で改めて確認すると、やはりとてもいい場所ですね。海を挟んで反対に香港サイドの高層建築が見えます。僕は、2018年に「M+は完成していないが一度どんな場所か見に行こう」と思って訪れたことがあります。当時、周囲は工事中の場所だらけで歩くのも大変でしたが、「M+パビリオン」という場所だけ完成していたので見に行きました。比較的近くにノーマン・フォスター氏が手掛けた「オーシャンターミナル・デッキ」がオープンしていて、そちらもとても気持ちのいい場所でした。「西九龍の対岸から見える風景はああいう感じなのか」と想像したときに、ただ単純に場所がいいというのはすごく強みがあるなと思いました。

タ ム：ありがとうございます。

五十嵐：では、内田さんに質問です。場所の話にも関係しますが、やはり「駅との関係」で、開発があり文化施設ができることは、以前であれば「百貨店モデル」みたいなものがあって、駅近くの百貨店では上層階に催事場としての展覧会

の施設があり、それで集客した後、下のフロアでショッピングをしてもらう「シャワー効果」を狙ったようなモデルが、20世紀の美術館があまり多くない時代から既にできていました。（近年では）そういった百貨店モデルもなかなか立ち行かなくなり、何かまた違った在り方での駅と文化施設の関係が再定義されています。東京ですと『東京都現代美術館（MOT）』は中心部ではないですね。あれがちょっともったいないな、と個人的に思っています。やはり都心にアクセスしやすいような好立地で、気軽に立ち寄れる場所というのは強みだと思います。現在、（高輪の）プログラムはまだ進行形でしょうか？

内 田：そうですね。

五十嵐：その辺の強みをどう生かすかということは、今、どのようにお考えでしょうか。

内 田：「強み」に関して、どの駅に近いかもすごく大事だと思っています。羽田にも近いし、品川なので（東海道新幹線を用いれば）大阪や京都などにも出やすいし、山手線の中心でもあります。品川にはホテルとオフィス、映画館もありますが、文化施設や商業施設はそんなにありませんでした。だから、商業施設のショッパエリアなど充実したものができますし、何か東京の中で「足りていなかった」ところに「規模感の大きい文化や商業などさまざまな活動をする場所」を目指しました。「なぜ高層ビルではなかったのか」という話は、私に関わる前から決まっていたのですが。私の解釈ですが、デパートの美術館はある意味「美術館に行くということ自体が消費の一環」なのです。だから、お金を払って何かを見てグッズを買って帰る。なので、お客さん自身が何かを生み出すとか、西九龍のようにただぼーっとするとか、うろうろするといった行動のような体験の余地は、ビルの中の美術にはほぼないと考えています。そういう意味では、われわれの文化創造棟——名前はもう少ししたら決めることになりましたが——いわゆる「消費型の文化」というより、「各個人が自分のクリエイティビティや自分の知的好奇心などを、深めていける場にしよう」というところが一番大きな違いではないかなと。先ほど「パブリックとプライベート」の話がありましたが、美術館では一般の人が自分のものを展示するようなことはいいですね。すごく選ばれたものしか展示されません。自由に展示するとすると公民館のような場所になってしまって、クオリティコントロールがほとんどされていない状態になります。何か「その間」をつくっていききたいというのはあって、ある意味どこかオープンで、どこかすごくエスタブリッシュしたものがあって、館の中で多様なレベルの人のクリエーションや研究に触れられるような場所——プログラムとしても、ファシリティもそういう形になっていると思っています。

五十嵐：なるほど、ありがとうございます。お二人からも質問やコメントはいかがですか。

山 中：ぜひ伺いたいです。まず先ほど紹介しました弊財団の小林理事長も「エリアマネジメント」という考え方を提唱しています。このエリアマネジメントというのは東京が抱えている一番大きな問題で……五十嵐さんもよくご存じだと思うのですが、東京は他の先進都市と比べて「ものすごく大き過ぎる」のですよね。面積的にもすごく大きいし、従業員や居住者の集積の数も圧倒的に多いです。東京で何かをやろうと思うと、一か所に面白いエリアがあっても何カ所もそのエリアを巡ることが——要するにポールさんたちが（グレーターベイエリアで）実施されているような「一か所に滞在して一泊すれば満足できる」体験型の観光が叶わないのが現在の東京が抱えているかなり大きな課題だと思っています。今回『高輪ゲートウェイシティ』をJRさんが手掛けるというのは、先ほど“connecting the dots”の話をさせていただきましたが、やはり「エリア同志をどのようにつなぎ、訪れた人たちの満足度を上げるか」とか、観光で体験できる数を増やす上で「電車」というのは非常に良いツールだなと感じています。（品川・高輪ゲートウェイ以外の）他のエリアとの組み合わせなどの話はあるのでしょうか？ 非常に気になったので、教えていただきたいです。

内 田：私が最近一番興味を持っているのは、われわれの施設が鉄道会社と直結していることです。東京の話というよりは日本の話になりますが、先ほどのポールさんの発言にもあるように日本には文化アセットがすごく積層的に、いろいろ

ろなところにあります。それをうまく発信できていないし、情報編集してつないでいくこともできていないと思っています。そういう意味で、鉄道というフィジカルでつながって「これに乗ったら連れていってくれる」とか「これはどこの街でやっている」というのが意識的に分かることがすごく強みだと思います。やはりフィジカリティはすごく大事です。加えて、JR東日本だけでも1,600以上の駅があり、駅もメディアなのです。だから、情報発信を駅そのものができる考えると、面でいろいろなことを展開できるのではないかと思うのです。

地方の秘境駅のように、一昔前であれば「何も無くて観光地としては全然候補に挙がってこないような場所」が、今はむしろ「何もないことが魅力」になっています。我々の活動が、JR東日本が持っているアセット全体を文化で盛り上げていくきっかけにもなるのではないかと考えていますし、そういう活動が日本の文化を掘り起こすきっかけになっていくのではないかと考えています。

東京の話について、おそらく私は山中さんと逆の考えを持っています。東京中を回るのは不可能ですね。だから、観光客や住人などが各々自分の好きなところを選んで、そこをむしろリピートするとか、その地域にもっと根差してキャラをつくっていく方が面白いのではないかと考えています。

私は、ロンドンに行くとかパーピカンの周りとかショーディッチとかミュージアムエリアばかりで、バッキンガム宮殿などには行かないです。（東京も）そうなってくると思います。一度だけ訪れた観光客にとっては回りきれなくてツライ街かもしれませんが、むしろ東京の魅力はやはり掘っても掘ってもまだ出てくる場所だと思うので、リピートしていただいて、好きな街で自分の居心地のいい場所とか、好きなものを見つけるスキルを上げて楽しんでもらう戦略の方がいいのではないかな、と個人的には思っています。

山 中：ありがとうございます。小林先生が提唱されている「エリアマネジメント」というものは、「自分のエリアの価値を高める・魅力を高めることに取り組む」という考え方なので、エリアとエリアをつなげるという点は今やっていない分野です。「“文化で”エリアとエリアをつなぐ」ことがこれからできるのかという質問でしたので、非常に参考になりました。ありがとうございます。

内 田：そういう意味では、私たちは「地域連携」をかなり意識して開発に取り組んでいます。高輪の方たちは本当に街の開発を楽しみにしてくださっています。周囲に学校が多いのですが、学生さんが活動する場所や、放課後に遊びに行く場所が全然なかったのも、その受け皿にもなっていくのではないかと考えています。今後の高輪のキャラクター形成に貢献できればと思っています。

五十嵐：今、質問が一つ届きました。高輪ゲートウェイの近くに住んでいらっしゃる視聴者からです。

「一介の市民が都市創造に参加する具体的な提案等があればお聞かせください」ということですが、そこまで具体化されているものはありますか？

内 田：一年後くらいにいろいろお声掛けできると思います。現状は建築の方が……高輪築堤跡<sup>iii</sup>が出てきたりで時間的に厳しくなっていて、一生懸命やっているところです。ただ、住民の方たちのヒアリングなど、地域でどんなことが必要かというのは現在も少しずつ行っています。小さなプロジェクトですが、地元の方たちとホップやトマトを育てるとか「街のプロジェクト」として始めていますし、駅を使ったフェスティバルというか、小さなフェスティバルウィークのようなものも設けていて、なるべく市民の方たちとの接点を増やそうとしている最中ですので、まず駅を中心に足を運んでいただければと思います。

五十嵐：ありがとうございます。そろそろお時間となりますのでまとめに入りたいと思います。建築もですが、東京にはポテンシャルがあると個人的には考えています。ですが、「本当にそれを引き出せているのか」という点についてはもっと頑張してほしいと思っています。「やる気があるのか」という話や、先ほどは「失敗を恐れず」という話もありましたが、そこに向かってまだまだ取り組むべきことは多いと思います。後半にもありましたが、地域の人との関係

や、見る人を育てるプログラムも非常に重要だと思っています。香港は本当に素晴らしいので、西九龍ほどのまとまったプロジェクトを東京で期待するのは難易度が高すぎます。東京では分散的でも相互にネットワークというか、つながっていくような展開ができればいいかなと思いました。タムさんの話も大変参考になりましたし、（香港に）行くのがとても楽しみになりました。最後に皆さんから順番に今日の感想やコメントを一言ずつ頂ければと思います。登壇順で、山中さんからお願いします。

山中：今日は、私の取り組んでいるリサーチにとってプラスになるお話をたくさんお聞かせいただき、本当にありがとうございました。日本には課題がたくさんあると感じていますが、先ほど内田さんもおっしゃったように「埋もれてしまっている東京の魅力をどうやって海外の人たちや外の世界の人たちにプレゼンテーションして、伝えていくか」という点はやはり一番やっていかなくてはいけないのかな、と今日また強く感じました。ポールさんが発表の中で、21世紀型の一要するに観光の形や美術館の楽しみ方、たぶん演劇の楽しみ方なども、今まさに新しい時代に突入しているとおっしゃっていました。その辺の昔の……日本だと昭和型みたいな言い方になるのかもしれませんが、「次の世代の文化の楽しみ方」を日本型でつくっていったらいいなと、強く感じました。ありがとうございます。

タム：私たちが西九龍文化地区を作ることができたのは、新しい土地を開発できたからです。新しい土地を作るために港を埋め立てたのです。ですから、計画を立てるのは容易でした。都市計画は既にあったので、やるべきことと言えば全体の統括です。例えば、ニューヨークではあらゆるものがマンハッタン中に点在しているので、すべてが有機的に発展していきました。どの都市にもそれぞれ限界とチャンスがあると思います。私が東京へ行く際、楽しみにしているのはサントリーホールで音楽を聴くことです。世界屈指のコンサートホールであるオペラシティもあります。こうしたものを私たちは参考にしたいのです。今日ぜひお伝えしたいのは「香港は世界中のパートナーと協力したいと考えている」ということです。日本と東京は言うまでもありません。ぜひ日本のアーティストたちと仕事がしたい、それを皆さんにお伝えしたいです。私は日本が大好きです。機会があれば東京や大阪へ行きたいと願っています。

五十嵐：まだ少し時間があるので、タムさんに一つだけ、聞きそびれたことをお伺いします。プレゼンテーションの中で、西九龍のプロジェクトというか、このエリアの構想が2008年頃に始まったと述べられていたかと思います。最初のきっかけというか、誰がどのように構想したかというところをちょっとだけお願いできますか。

タム：この構想は2008年以前からありました。当時、香港といえばショッピングと食事、そして金融の中心地でした。当時の香港政府は、人材を惹きつけ観光客を呼び込むために観光業以上のものを必要としていたのだと思います。例えるならロンドンとニューヨークです。多くの人々がこの二つの都市で働きたいと考えています。ライフスタイルだけが理由ではありません。それに加えて、芸術と文化があるからです。芸術と文化が都市での生活をより面白いものにし、住みやすく、魅力あるものにします。多くの都市が、そうしたイメージを持ちたいと考えています。さまざまな調査で示されていますが、とあるレポートによれば、多くの人々がロンドンに惹かれる理由は「芸術と文化のある街に住みたい」と考えているからだそうです。しかし、一度そこへ引っ越してしまうと、芸術や文化のために出かけることはありません。つまりそれはイメージなのです。欲望であり、夢なのです。だから一度都市に住んでしまうと、思ったほどには外出しないのです。当時の香港政府は、ショッピングと食事と金融ハブ以上のものが必要だと考えていました。ソフトパワーのようなものを必要としていて、そこでこのアイデアが浮上したのです。西九龍はグレーターベイエリアから多くの観光客を惹きつける“磁石”になるべきだと考えられていました。当時は「パールデルタ（Pearl Delta）」と呼ばれていたのですが、その後、グレーターベイエリアと名付けられました。つまり、芸術と文化で海外の観光客だけでなくグレーターベイエリアの人々をも香港へ呼び込もうと考えられていたのです。そうしたアイデアが浮上して2008年頃にまとまったのです。その後政府は、当局と公的機関の設置を決定した4年後の2012年に、このプロジェクトへ216億香港ドル（約3,840億円）を投入しました。

内 田：ありがとうございました。今日は街で文化施設をずっと運営している“先輩”であるポールさんのお話も聞けましたし、山中さんのリサーチは私たちが直感的にやっていることの論理的な証明をしてくださっているのも勉強になりましたし、本当にいい時間でした。都市の話というと、どうしても「東京が」、「香港が」という話になってしましますが、世界的に見たときに、プレーヤーはもっとシフトしていいのではないかなと思います。「アジア人、頑張ろうぜ」というふうに。

今日、本当であればポールさんと直接お会いしたかったのですが、こういった形でコミュニケーションが生まれて、東京と香港でコラボレーションして、何か新しいもの——アジアのコンテンツをつくれたらと思います。というのも、ブロードウェイとか、ロンドンのウエストエンドとかは基本的に「西洋のビジネスモデルでできているコンテンツ」というか、いわゆるショービジネスも、ミュージアム自体のビジネスも、やはり西洋のものがモデルになっていると思うからです。例えばK-POPもそうだし、チームラボみたいな「どこに行ってしまうのだろう」というぐらいに世界に展開しているものとか、日本だったらアニメや漫画など、西洋モデルではない文化コンテンツはすごくたくさんあると思います。だから、それをアジアのチームでつくっていったらいいなと、まず一つ思いました。あと、東京自体は「各地域のキャラクターを立てていく」ということが大事なのですが、プレーヤー同士の連携がもっとあってもいいかなと思っています。例えばニューヨークやロンドンでは、ミュージアムに勤めている人は他のミュージアムの展示をみんな無料で見られるパスを持っています。そういう連携が東京には本当にないので……私たちが新しい館ですが、東京都などにも働き掛けて、プレーヤーたちをサポートするシステムというか、パブリックなシステムをつくっていったらいいなと思いました。ポールさん、一緒に何かやりましょう。

---

<sup>i</sup> 外貨レートは本フォーラム開催時のものに基づく（1HK\$=17.78JPY、2023年3月2日時点）。

<sup>ii</sup> 本フォーラム実施時。開催期間は2022年11月12日(土)～2023年5月14日(日)まで

<sup>iii</sup> 高輪築堤跡（たかなわちくていあと）開発予定地にて発掘された遺構。調査の結果重要な遺構として移設されることになり、当初の建設予定地から位置変更が必要となった。